創立40周年に寄せて

能登路　雅　子
アメリカ太平洋地域研究センター長

東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター（CPAS）は、2007年に創立40周年目を迎えた。周知のように、前身であるアメリカ研究資料センターは日本のアメリカ研究基盤を整備するため、国立大学唯一のアメリカ研究機関として1967年に設立され、その所蔵文献資料は全国の研究者や学生に広く公開されてきた。2000年に改組発足したアメリカ太平洋地域研究センターは北アメリカとオセアニアを中心とする太平洋地域に研究対象を広げるとともに、引き続き関連研究資料の収集・公開の充実を図っている。長年にわたってアメリカ研究の先達が幾多の困難を乗り越えてセンターを発展させ、また関連諸機関のご支援、学内外の利用者の方々の熱心なサポートによってセンターは今日にいたることができた。先人のご尽力とお導きに改めて心より御礼を申し上げたい。

40周年はまた、多様な記念行事を通じてセンターの存在意義を再検討する絶好の機会でもあった。2007年9月29日に開催されたCPAS 40周年記念公開シンポジウム「反米：その歴史と構造」は、駒場キャンパスの18号館ホールが満席となる盛会であった。今回の企画は9･11事件以降のグローバルな反米意識の歴史的背景と構造を比較検討する内容で、報告者として日本、中国、中東、フランスなど、アメリカ以外の地域を研究対象とする若手学者でパネルを構成し、多様な立脚点からアメリカの問題性に迫るという斬新な手法をもちいた。コメンテーターとして情報社会学やアメリカ政治外交史の日本人専門家のほか、アムステルダム大学およびテンプル大学教授に発言をお願いし、聴衆からも例年に勝る積極的な参加が得られた。

今年で14回目の公開シンポジウムであったが、すでに毎年参加される一般市民も多く、会場における質疑応答やアンケートにも熱心な反応が寄せられた。本シンポジウムの報告は本号に掲載されているが、別途、単行本としても出版の準備が進められている。超大国アメリカの行動に世界が不安を感じ、混迷を深める21世紀初頭の現在、アメリカの意味をグローバルな関係性から相対的に捉えなおすという試みは、日本におけるアメリカ研究自体にも新しい方向性をもたらしたといえるだろう。

シンポジウムのあとで駒場キャンパス内で開催された40周年記念レセプションも、センターのこれまでの実績を将来の展望へとつなげるイベントであった。冒頭で小島憲道総合文化研究科長が当センター創立の歴史的な背景に南原繁、矢内原忠雄両東大総長の並々ならぬ情熱とビジョンがあったことに言及され、センターの源流ともいうべき東京大学・スタンフォード大学アメリカ研究セミナー（1950年–56年）の企画運営にも深く関わられた嘉治元郎本学名誉教授が乾杯のご挨拶のなかで、1960年代の貴重な思い出やご苦労を語られた。

当夜はアメリカ研究振興会、米国大使館、日米教育委員会、国際交流基金日米センター

など各界からの来賓をお迎えし、立教大学アメリカ研究所、同志社大学アメリカ研究センターなど全国のアメリカ研究機関の代表者からも心のこもった祝辞が寄せられた。そのなかで、上記の「反米」シンポジウムにも出席されたロナルド・ポスト駐日米国公使が「アメリカは外国からの研究、とりわけ批判的な視点を必要としている」という趣旨の発言をされたことは、日米間の学術交流が新しい時代を迎えていることを実感させた。

本センターには学界のみならず、財団、政府関係者の訪問の機会も多いが、2007年6月にはシーファー駐日米国大使がセンターを公式訪問された。特別講演会「駐日米国大使トマス・J・シーファー大使と語ろう：政治・文化・日米関係」に詰めかけた数百名の学生たちと大使が率直な対話をされたことも、センター40周年を飾る出来事であった。

財政面、図書整備、セミナー開催において当センターは従来から多くの学外からの支援を受けてきた。2007年には豪日交流基金より約400点のオーストラリア研究関連図書が寄贈され、これを記念して4月にマクレーン駐日オーストラリア大使、ミラー公使らをお迎えして、センター図書室で寄贈式典が開催され、日豪間の学術協力の発展について親しく語り合う機会をもった。近年、移民政策、多文化主義をはじめ、経済、現代文学やアボリジニ芸術など、日本におけるオーストラリアへの関心は高まりをみせており、オーストラリア客員教授制度をもつ当センターはオーストラリア研究の全国的拠点のひとつとしても重要な存在となっている。

このようにセンターは名実ともにわが国のアメリカ太平洋研究の要としての役割を果たすべく邁進しており、大型研究プロジェクトも複数進行中である。次の50周年に向け、広い領域にわたる先駆的な研究を推進していくうえで、今後とも関係各位のお力添えを賜りたく、お願い申し上げる次第である。

最後になるが、本学名誉教授でセンターの大恩人である斎藤眞先生が去る1月16日に86歳でご逝去された。2005年の秋に文化勲章を受章されたあと、当センターのニューズレターの巻頭言を快くお引き受けくださり、東大・スタンフォード大学アメリカ研究セミナーの開放性や地域研究への意気込みが今日のセンターに受け継がれていることを語っておられる。先生はよく駒場キャンパスのセンターに足を運ばれ、直接薫陶を受けることがなかった者でも、その温和で真摯なお姿に接して感銘を受けることが多かった。昨年1月に図書室にお見えになったのが今となっては最後となった。日本のアメリカ研究の泰斗として最晩年まで研究の第一線に立ち、後輩の指導にあたられた斎藤先生にセンター教職員一同、謹んで感謝の気持ちを捧げたい。